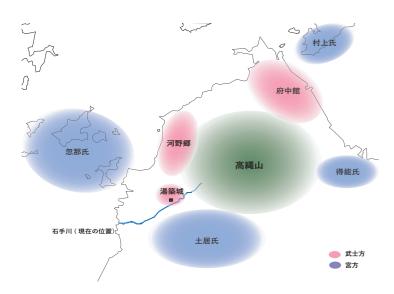
「松山の都市形成史2020」

# 2.1 道後の歴史的空間構成とその成り立ち



中世伊予の勢力図 『道後温泉 増補版』をもとに作成

# 道後温泉本館 円満寺 宝厳寺 場神社 伊佐爾波神社 道後町遺跡 南町 今市筋 飛紫城 上古市 石手寺 門前町 上市 石手村前遺跡

中世の道後周辺図 『道後温泉 増補版』をもとに作成

# (1) 道後温泉に伝わる諸伝説

足を痛めた白鷺が岩の間から流れ出る湯に浸すことで傷を癒し 飛び立ち、それを見た村人が手を浸すと温かく、温泉の効能を確 認したという伝説がある。6世紀には、聖徳太子が病気療養のため 道後温泉に滞在したと伊予国風土記逸文に記されている。その後、 8世紀には、行基と伊予の豪族越智氏(後の河野氏)が力を合わせ、 温泉の週報・経営・湯釜の設置を行ったと豫州道後温泉古事記に 記されている。これらの時代から、道後温泉は湯治場としての機 能を有していたとされている。



左)古代白鷺の伝説、右)聖徳太子の来浴の伝承 出典:「愛媛松山道後温泉ホームページ」

# (2) 中世河野氏による湯築城築城と城下町の形成

# 1) 河野氏による湯築城築城

鎌倉〜室町時代にかけて足利尊氏に仕えていた河野氏は、宮方に仕えた得能氏、土居氏、村上氏、忽那氏らの在地勢力に対抗するために石手川が道後平野に流れ出て形成した扇状地の西岸に位置する小さな独立丘陵である伊佐爾波岡(現在の道後公園)に湯築城を築城したとされている。

## 2) 地形から見た立地

湯築城は、北方の今治に続く高縄山系が道後平野に突き出した部分、独立丘陵に立地している。高縄山系には中世城郭が多く分布されており、それらは山道によって結ばれていた。道後に城を構えることで、河野郷、府中館、湯築城のネットワークを作り、道後平野、風早平野、府中方面に睨みを利かすことができることとなったと考えられる。

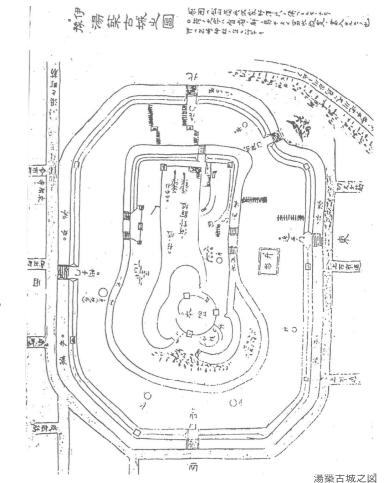
## 3) 城下町と湯之町と石手寺

古代における温泉経営は、国司や有力寺院あるいは豪族が直接 経営を行うことが多かったといわれる。中世では河野氏の勢力が 台頭し、「温泉館」を設置して温泉の監督にあたった。江戸時代に 作成された伊予湯築古城之図城には、東側(大手側)に切抜門・上 古市通・上市通、西側 (搦手側) に湯之町筋・今市町・御出町・南 町・戒能筋という名称があり、町場が存在していたことが伺える。 湯築城の東にある切抜門はもともと石手寺の門と伝えられており、 石手寺との間に市場が設置され、商工業等の文化が発達したとさ れる。それゆえ、現在も今市・上市の地名が残っていると言われる。 石手寺と河野氏は深い関係にあり、毎月6回は僧が温泉に入浴す る日が決まっていた河野通直制札が残されている。その後、温泉 経営は、石手寺末寺の明王院に委嘱した。温泉のある「湯之町」 には貴賤が群集し、人々の保養・交流の場としてにぎわっていた と言われる。河野氏滅亡後、湯之町が近世に入っても行政上の町 場として取り扱われたのに対し、城下の町場は廃城とともに衰退 し、商工業者は松山城下町に移転させられていったとされる。

# 4) 遍路・文化・芸能

古来から道後温泉には、皇族・貴族・官人・文化人が多数訪れていた。貴賤が群集し、人々の保養・交流の場として賑わせており、室町時代の大名が置いた拠点の多くから、文化や芸能が生み出されたといわれる。河野氏によってなされた大山祇神社への膨大な連歌の奉納は、その一例である。

2 道後 2.1 道後の歴史的空間構成とその成り立ち



『城下町松山と近郊の変貌』より引用

## 伊佐爾波神社



筆者撮影 2021.4

旧鎮座地は「伊佐爾波岡」と呼ばれていた湯築城跡とされる。河野氏による湯築城築城の際に現在の地に遷し、道後7郡総守護とされた。社殿は、全国に3例のみ存在する八幡造であり、国の重要文化財に指定されている。

# 湯神社



筆者撮影 2021.4

鶯谷の大禅寺前に創建され、その後、 冠山に鎮座していた出雲崗神社と合祀し、 現在の位置になる。18世期に地震で温泉 が止まった時、再湧出の祈願を繰り返し、 再び湧出が始まったと言われる。現在も 復興を感謝する湯祈祷が行われる。

# 湯釜薬師



筆者撮影 2021.4

749年に作られた全国最古の湯釜。明治27年の三階楼の本館建立まで養生湯で使われていた。昭和25年に現在と同じ道後公園に移し、屋根をつけ湯釜薬師として祀られている。昭和29年、愛媛県指定有形文化財に指定されている。

# 宝厳寺



筆者撮影 2021.4

665年に建立された古寺で、鎌倉時代後期(1292年)に時宗の寺として再興された。時宗の開祖、一遍上人の誕生地として伝えられている。荘厳な寺であったが、いつからか門前の宿坊が遊郭、ネオン街へと変遷した。

# 石手寺



松山市公式観光 WEB サイト フォトギャラリーより

8世紀ごろに建立された。河野氏の庇護を受け8世紀-16世紀に最も栄えた。国宝である楼門、重要文化財である本堂・三重塔・鐘楼・護摩堂は、14世紀に新・再建されている。古くから、四国霊場第51番札所としても知られる。

# 義安寺



聿者撮影 2021.4

1539年に河野義安により建立された.名は建立者に由来する。背後にあったとされる砦は道後冠山と伴に湯築城を守る役割をになっていた。寺門の道路に沿い流れる御手洗川には蛍が生息していたとされる。写真は誓いの泉。

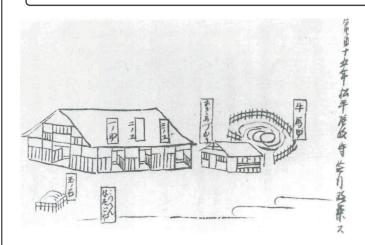
2-01

2-02

「松山の都市形成史2020」

# (3) 近世道後温泉の町場と色町の変化

# 江戸時代初期:松山藩政による温泉経営の開始



寛永十五年絵図 (1638 年寛永 1 5 年 ) (出典:『道後温泉本館の歴史』)

# 1) 松平定行による積極的な経営

江戸時代に入り、松山藩は道後温泉の収入に目をつけ、浴場の 改修や積極的な温泉経営に介入した。また歓楽街の温泉場を武士 が直接取り締まることに不都合が多かったため、鍵屋であった明 王院に班の機関として温泉の鍵預かりを命じ、温泉経営や温泉の 取り締まりを行わせるようにした。

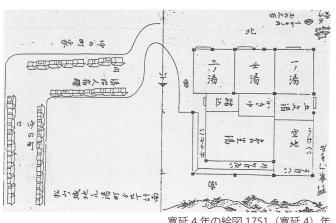
### 2) 道後温泉の改修

温泉の様子を描かいた『松山業談第二巻上・津田家記』によれば、「寛永十五年絵図」のように改修を行い、温泉を3区域にわけ、一の湯は土人や僧侶、2の湯は婦人、3の湯は庶民男子が利用していたようである。その他、十五銭湯は土人の妻、十銭湯の一つを養生湯と言い、旅客難民が利用していた。その下流には馬湯と呼ばれる馬専用の湯が設置されたとされる。

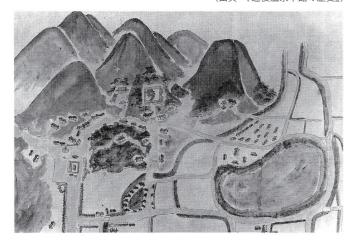
## 3) 道後温泉は重要な資源

16世紀中ごろ地震により温泉が埋没し、湯神社の社殿も大破したことを始め、地震による影響を受けやすく出湯の不安定性が問題であったとされている。そのため松山藩主らを筆頭に官民一体で湯神社・伊佐爾波神社で祈祷を行ったことを記した書物が多く残されている。これは松山藩にとって道後温泉が重要な資源であったことが考えられる。

# 江戸時代後期:茶屋の発展と道後温泉地区の拡大



寛延 4 年の絵図 1751 (寛延 4) 年 (出典:『道後温泉本館の歴史』)



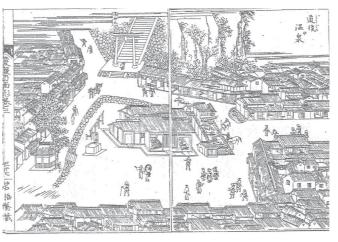
# 4) 湯之町の町屋と遊女の許可

1751 (寛延 4) 年、現在の本館と商店街を描いた絵図が残されている(左図)。これを見ると湯屋の構成と、湯屋の西側に位置する湯之町の町屋の構成が描かれている。湯之町は、現在の商店街とほぼ同じ L 字形の道に商店や宿が立ち並んでいたようである。この湯之町に、1773 (安永 2) 年に遊女を置くことが許可されている。この頃は、道後の主な町屋街に遊郭的機能が配置されていたということである。

### 5) 道後温泉街の全体構成

1786 (天明6) 年に作成されたと考えられる「道後村絵図」という絵図がある。絵図は西から東を向き、山々を背景にその麓に道後温泉街が形成されている様子が描かれている。山々の手前に描かれた丘陵は冠山で、湯神社が立地する。湯屋(現在の本館)は、その冠山の左手(北西側)にある。湯屋の西には、前述した湯之町があり、密度の高い町屋として描かれている。湯屋の東は、遍路道沿いにちらほらと立地する町屋が描かれている。冠山を中心とする道後温泉街の絵図右手(南側)には、中世時代の遺構である湯築城と城下町の跡が描かれている。

天明 6 年 道後村絵図 (出典:『道後温泉本館の歴史』)



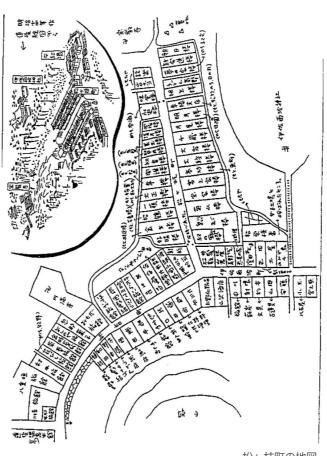
愛媛面影鳥瞰図 1866(慶応 2)年 (出典:『道後温泉本館の歴史』)

### 6) 茶屋の変化と温泉街の変化

松山藩は18世紀中ごろに形成されていたであろう道後温泉と遍路道沿いの宿場による街の収益を増大化させようと考えたため、1840(天保11)年、飲食兼宿屋業者の株仲間十軒茶屋が認められ、若竹屋・今津屋・増田屋・玉屋・若松屋・木下屋・津田屋・松屋・橘屋・讃岐屋の遊郭が組織された。一軒に数人の湯女・飯盛女・赤前垂・手たたきなどの私娼が抱えられ、湯治客や遍路などを相手にしていた。1853(嘉永6)年にはこれらが風紀を乱すという理由で営業が禁止されたが、1856(安政3)年に線香1本について6分の賦課金を町へ納める条件を引き換えに許可し再興した。

宮崎清治著の「道後温泉の近代化」に掲載の1733年(享保十八年)の絵図には道後温泉本館南東側に十軒宿と記されている。したがって、1866(慶応2)年の「愛媛面影鳥瞰図」の絵図の道後温泉本館南東側にも十軒宿があったと考えられる。

# 明治初頭:遊郭街の形成



松ヶ枝町の地図 (出典:『忘れかけのまち 松山戦前・戦後』)

# 7) 松ケ枝町遊郭構想

明治に入り、1871 (明治4) 年に十軒茶屋が廃止され、茶屋業 者が40軒に増加した。1872 (明治5)年には、太政官布告で人 身売買が禁止されるも、翌年には愛媛県が湯之町にある 40 軒の茶 屋業者の営業を許可している。1874 (明治7) 年に士族の半数が 奉還金の支給を受けたことにより景気も良く、道後は不夜城の有 様であったといわれる。このような状況の中、「引き転び」という 私娼が増加するなどした結果、性病が蔓延し、県内からの徴兵令 者の不合格者増加などが問題となった。そのため、政府の富国強 兵策に沿った性病防止を主たる目的とした遊郭が構想され、愛媛 県は1876 (明治9) 年に一定区域内に限る営業を命じ、翌年に松ヶ 枝町遊郭として営業を開始した。当初、祝谷に遊郭設置を求めて いたが、竹藪・馬捨場であり土地の安い宝厳寺前の山道が選ばれた。 遊郭に対する規制や許可の履歴をみれば、風紀上の機運が高まっ ていたことなども影響し、遊女を抱えた施設は道後温泉の中心的 な商業地である湯之町の外に流れていった経緯が推察される。こ れに24軒が応じ、その他は転廃業した。この松ケ枝町遊郭は、 1957 (昭和32)年の売春禁止法が成立するまで、80年間紅灯が 燈し続けていた。

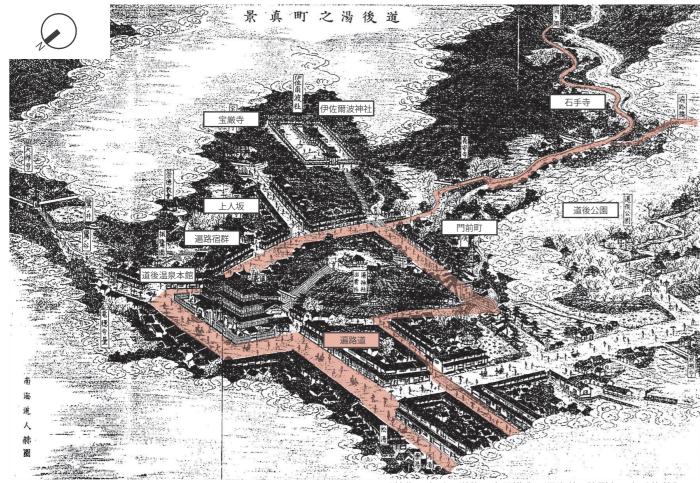


松ケ校町の与具 (「片岡先生道後スクール資料」より抜粋)

2-03

# (4) 道後温泉の近代化

# 明治初期:湯屋の整備と鉄道敷設



明治期における道後の空間構造:遍路道は諸説あるため複数記入 『道後温泉案内記(1897)』の扉絵に筆者加筆

### 1) 道後温泉湯屋の所有と管理の変遷

1871 (明治4) 年、温泉経営権は廃藩置県により藩から国、国から県へと移った。石鉄県の監督となった 1872 (明治5)年には、一の湯、二の湯、三の湯の浴室を改造し、新たに楼を架して浴室の休憩スペースを設けた。1878 (明治11)年からは、湯之町の有力者で組織された源泉社が積極的な運営を行う。1889 (明治22)年の道後湯之町の独立により、1890 (明治23)年から町が運営を行うとともに、道後湯之町に所有元が変更される。1891 (明治24)年には常設委員会を設置し管理することとなる。この体制は、1943 (昭和18)年に道後財産区となるまで続いた。

# 2) 明治期における湯屋の整備

1891 (明治 24) 年、「養生湯」を改築し、湯之町の町屋街に「まつ湯」「薬湯」を新築した。1893 (明治 26) 年には、「一の湯、二の湯、三の湯」の改築を開始し、1894 年には「霊の湯」「又新殿」の改新築を行って、現在の道後温泉本館が完成した。

### 3) 道後公園

道後公園は豪族河野氏の居城湯築城跡であるが、1879 (明治 12) 年に陸軍省が換地として買収し、松山公園 (現城山公園) と交換して県営の植物園となり、1888 (明治 21) 年に県立道後公園として許可された。

### 4) 伊佐庭如矢の功績

伊佐庭如矢は初代道後湯之町長を務め、当時老朽化していた道後温泉の改築・湯之町の財政難などの多くの問題を抱えながらも、観光地としての発展を願い多くの功績を残した人物である。主に道後温泉本館改築を行う。100年先の道後温泉を思い、反対運動に対して誠心誠意向き合い町民を納得させ偉大な業を成し遂げた。道後温泉を松山市の有名な観光地にするため、温泉地への観光客誘致を目的として道後鉄道の敷設を行った。



伊佐庭如矢氏の写真 (出典:『道後温泉 増補版』)



道後温泉本館の写真 (「片岡先生道後スクール資料」より抜粋)

# 5) 鉄道敷設の経緯

伊佐庭如矢を始めとする道後有力者は、道後温泉へ温泉浴客を輸送する目的で、1895 (明治 28) 年松山市一番町一道後間に道後鉄道を開通した。乗客は順調だったが、営業成績は芳しくなく、1900 (明治 33) 年に伊予鉄に合併した。1911 (明治 44) 年には電車に改め開通した。

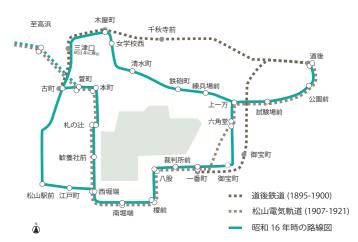
1911 (明治 44) 年、松山電気軌道会社が三津 - 松山 - 道 後間に電車を走らせたので、伊予鉄と松電の電車が道後 - 一 番町間を並走していた。2 社が共創して乗客を道後に送り、 温泉客は年々増加するようになった。1921 (大正 10) 年に 伊予鉄は松電と合併した。

# 6) 道後駅による空間構造の変遷

従来、道後温泉遍路道や街道から道後温泉街に入っていたと考えられるが、鉄道駅開設によって道後地区へのアプローチ空間が大きく変わった。伊佐爾波神社の参道と湯之町本通が交わる位置に道後駅が設置されたことにより、駅が道後温泉の玄関口として位置付けられ、駅から道後温泉本館を結ぶ動線上の賑わいが作られていく基盤が形成されたといえる。



道後周辺の空間構造 1913 年道後全図をもとに作成



昭和 16 年当時の路線図 『伊予鉄が走るまち今昔』をもとに作成



明治 30 年ごろの道後駅 (出典:『伊予鉄が走るまち今昔』)



明治末期の道後商店街 (出典: 『道後温泉』)



明治5年ごろの道後温泉の様子(出典:『道後温泉』)



明治 30 年ごろの道後駅 (出典: 『道後温泉本館の歴史』)

# 観光利用・温泉街としてのさらなる繁栄

### 7) ロシア兵捕虜の入浴

1904 (明治 37) 年から 1905 (明治 38) の日露戦争では、最大時で 4000 名をこえるロシア兵捕虜が松山に収容されていた。捕虜と約 3 万人の松山市民の間には国際文化交流があり、双方に大きな刺激を与えたといえる。捕虜は政府の方針や地元の歓待によって厚遇され、自由外出の際には市内の商店街や道後温泉にも向かった。将校は霊の湯、一般兵は神湯に入浴していたとされる。



道後温泉の休憩室で寛ぐ捕虜たち (出典『湯の町道後隅々案内』)



1905 年 道後で遊ぶ俘虜将校たち (出典『創造都市松山 2 部誇』)

### 参考文献

- ・道後温泉 増補版 松山市 昭和57年
- ・河野氏の歴史と道後湯築城 川岡勉 青葉図書 1992 年
- ・湯築城跡 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 2019 年
- ・道後温泉本館の歴史 松山市 平成 6 年
- ・データベース 「愛媛の記憶」 愛媛県史地誌 II 昭和 59 年 愛媛県生涯学習センター

https://www.i-manabi.jp/system/regionals/regionals/ecode:2/36/view/5021

- ・愛媛県中世城館跡 分布報告書 -
- ・城下町松山と近郊の変貌 平成4年
- ・忘れかけのまち 松山戦前・戦後 池田陽三 愛媛新聞社 2002 年
- ・伊予鉄が走る街 今昔 大野鐵・清水純 JTB パブリッシング 2006 年
- ・創造都市松山 2部誇 愛媛新聞社 1989年
- ・愛媛松山道後温泉ホームページ 道後温泉事務所 https://dogo.jp/about
- ・湯の町道後 隅々案内

2-05